

【氏名】 猿谷 弘江

【所属大学院】(助成決定時)

ミシガン大学大学院 社会学部

【研究題目】

アメリカの語るデモクラシーと戦後日本の知識人の思想と行動: 1945-1970 年

(Knowledge and Acts for Democracy: Japanese Intellectuals and US Liberal Democracy, 1945-1970)

【研究の目的】

本研究は、1945 年から 1970 年までの間、アメリカの民主主義の概念が、日本の民主主義の議論にいかに関与を与えたかに関し、特に、戦後日本の知識人に焦点を当て、社会学的見地から明らかにすることを目的とする。日本の知識人の民主主義に関する個別の思想については研究蓄積があるものの、アメリカの影響という観点から、日本の民主主義を歴史的、体系的に捉えた研究は、あまりみられなかった。本研究では、戦後日本社会における民主主義に関わる思想だけでなく、行動や実践といった面も含め、アメリカの影響という観点から検討する。自身も運動に関わった政治学者・高島通敏は、1960 年の日米安全保障条約改訂をめぐる運動、1960 年安保が戦後精神史、及び戦後日本の知識人の役割において分水嶺をなしたと指摘する。本研究もまた、1960 年安保を戦後の歴史の転換点とみなし、1960 年安保前後で区分し、検討する。

【研究の内容・方法】

本研究は、理論的に、主として二つの理論を出発点とする。社会学者ジョン・マイヤーによる制度学派 (institutionalism) の理論と、ユルゲン・ハーバーマスによる公共性の理論である。前者は、民主主義的な制度の世界的な伝播を分析する。しかし、制度に焦点が置かれ、理念や概念といった非制度的な民主主義の要素がいかに関与するのかは明らかにしていない。後者は、知識人と、民主主義の基盤となるような公共の空間の形成を歴史的に分析する。しかし、国内の動向にのみ焦点があてられ、国外の影響という点では分析の射程にない。戦後日本のケースは、この二つの理論を批判的に発展しうるのではないかと考えた。方法論的には、主として文献調査、また当時を知る関係者にインタビューを行うことにより、個々の思想や行動を検討した。

現時点では、本研究の課題の前半期、1960 年安保の時期までを検討した。また知識人と共に、1960 年当時、歴史の大きな役割を担っていた学生の動向も検討した。知識人の中で特に検討の対象としたのは、清水幾太郎、丸山真男、竹内好、鶴見俊輔、久野収である。戦後知識人の広範なネットワークは、一方で、講和問題に際して問題提起する「平和問題談話会」と、他方で、鶴見を中心とした人々の思想と実践の問題を探究する「思想の科学」になどよりはぐくまれていく。また

1950年代の基地闘争などの各種の社会運動に参加することを通じて、1960年安保に際し、「安保問題研究会」「安保批判の会」に代表されるような知識人が「共闘」する形態ができあがる。また、このネットワークは、公私にわたって形成されていた。例えば、上述5人のうち、清水を除く4人の間には、私的な交流があったことが確認できる。

民主主義の思想としては、1960年安保まで「民主主義」は「平和」の問題と分かちがたく、多くの場合、それは平和の問題として論じられることが多かった。しかし、依然「平和」と不可分であったものの、安保闘争の際には「民主主義」の問題が立ち上がり、街頭に繰り出す何百万もの人々は、当時の知識人の眼には、もはや「大衆」ではない「市民」の登場、民主主義が結実しつつある社会と映った。アメリカの影響という点では、清水、鶴見、久野はそれぞれプラグマティズムに深く学んでいた。しかし、それは思想的に展開したというよりはむしろ、運動の実践として展開していったといえる。そして、学生の場合は、特に1960年安保で着目されたブント(共産主義者同盟)などにおいて、理念的には民主主義は「ブルジョア民主主義」として批判される対象であったものの、運動の参加、実践においては、「討論と採決」という民主主義的手続がとられた。

【結論・考察】

これまでのところ、民主主義の思想といった面で、アメリカの影響というものを系統的に抽出することは困難であった。戦争の記憶が生々しく、平和と民主主義が分かちがたく結びついていた中でむしろ言及されていたのは、スイスなどの永世中立国や、独立を達成したばかりのアジア・アフリカ諸国であった。しかし、実践という面では、特に、久野、鶴見による人々の運動の実践の中に思想、また「根もとからの」民主主義の可能性を見出していこうとするプラグマティズムが、安保、その後の社会運動の形態に大きく影響を与えていたことが指摘できる。また、新教育制度の下でクラス討議と採決という民主主義的な手続を体得した学生が、その手続を踏襲しつつ運動に参加していた点は、アメリカの影響という点で重要であるだろう。今後、1960年安保以後、このような動向が一方でいかに未だ踏襲され、他方で批判されていくかを検討したい。